

# 歴史散歩

## 雲林院青木遺跡出土の双耳壺

芸濃総合文化センター2階の芸濃郷土資料館に、芸濃地域の雲林院青木遺跡から出土した縄文土器が展示されています。

これらの縄文土器は、今から約4000年前の縄文時代後期の始めごろに作られたものです。今紹介する双耳壺は、壺の口の部分は欠けていますが、肩の張った胴部がほぼ完全な形で残っており、胴部に付けられた一對の瘤状の突起(耳)には、これを刺し貫くようにして縦方向の穴が開けられています。

壺を飾る文様は、この時代に流行した磨消縄文と呼ばれる手法のもので、へらなどで刻んだ太い線で四つの渦巻き文を描き出し、線と線の間びつしりと縄目を付けた部分と縄目を付けない部分を交互に配して文様を完成させています。また、興味深いことに、置くが見えなくなってしまう底面にも、なぜか文様が施されています。

この壺は土坑(人によって掘られた穴)の底から出土したものです。口の部分は意図的に打ち欠いて取り



芸濃郷土資料館の展示室

払ったよう

で、供え物と

して埋められ

た可能性が高

いと考えられ

ます。このこ

とから、この

土坑は単なる

ごみ穴などで

はなく、例え

ばお墓のよう

な、何らかの

儀礼に関係した穴

だったのではないかと考

えられています。

口の部分が欠けているとはい

え、ここまで

形が分かる双耳壺の出土例は全

国的にも珍

しく、しかも、この壺の場合

は、出土状況から

その使用形態まで推察できる

事例であること

から、縄文時代の研究にとつ

て貴重な資料でもありま



双耳壺

錫杖ヶ岳山麓の台地一帯は、縄文時代の人々にとつて、恵み豊かな地であったと想像されます。

一年のうちで寒さが最も厳しいこの時期、寒さにとらわれて、つい家にこもってしまいがちですが、資料館に足を運んで、かつてこの地にあつた人々の営みに、思いをさせてみてはいかがでしょうか。

